

『島の自然と文化学』

LIBRARY ICHIKO 158 SPRING 2023 4月30日 発売予定



〈環境〉とは、フランス語で milieu という。場所 lieu (place) の真ん中という意味や場所〈間〉関係という意味になる。「環」境「境」も〈境〉の環(めぐり)だ。この関係存在を実体Ⅱ物的に時間停止してはならない。日本は、〈際〉〈境界〉の文化環境に多分にある。

「環境」は地球環境と大きく拡大され、気候変動や温暖化が、何か向こう側の客観的出来事であるかのように感覚認知されがちであるが、環境とは〈場所〉であり、自分の生活生存の足元であり、その場所が地球である。凄まじい速度で回転しているが、太陽や月や星が動いていると感じ、足元は動いていないかのようにおもわれている。さらに、環境は経済的な均一空間とされて、どこでも同じ太陽光パネルや風車が作られ環境事業であるかのようになりなされ、実際には景観を壊している。環境は汚してはならない、環境は大切だと誰しもが思っているが、そうならないのは、環境を主客分離の客観世界だと設定し、経済は均質・均一になされることだ、社会の統治はどこも平等に同じだという認識から何も変わっていないためだ。近年は薄れてきたが、まだ環境と経済は相反対立するとみなされている。〈環境〉への誤認が、環境を重視する人たちにまで浸透しているのは、近代認識体系のままで考えられているためだ。

ここを脱するには、環境とは場所であること(場所環境)、資本であること(環境資本)、そして経済圏ではなく生活環境市場であること、さらに、分配と流通の領域は物品交通ではなく環境世界であること、などを新たな認識によって概念組み換えねばならない。

考えるべきは、〈環境〉と〈経済〉と〈文化〉との多元的な調整・調和である。つまり、互いに相反するものを共存させ共働させる、高度な知的資本と技術である。それには、場所総体から考え、自然資本、景観資本、環境資本、文化資本を共存関係させていく資本経済と場所統治が要される。そのために、時間概念、空間概念を根源から組み立て直さねばならない。象徴資本において時間は静止させられていくが、そこへの想像界作用で時間は動いていき、現実界で時間は〈隔たり〉の継続期間(duration)として常に動いている。場所環境時間としての言説を生産していかねばならない。そこに、シニフィアンは、現前を〈外〉存在(ex-sist)させていく。場所環境シニフィアンが、産業社会経済の下で、眠らされているゆえ、目覚まさせて aware にくことである。

今回は〈島〉の場所環境の時間・空間・身体を、田中俊徳氏のディレクションのもとで目覚ませていただいた。日本は島嶼国、列島である。そこには、多様な場所資本、文化技術資本、身体資本などが存在している。既特集であった南相馬、日本橋などの場所考証につながる場所環境論である。本誌はこれからも〈環境〉を新たな思考・考証から探究し続けていく。

「LIBRARY ICHIKO」は季刊誌です。次号は二〇二三年七月末発行予定

【監修・アートディレクター】
河北秀也(かわきた ひでや)
1947年生まれ。日本ペリエールアートセンター主宰。著書に『デザイン原論』など。
本誌プロデューサー、アート・ディレクター。

【編集・ディレクター】
山本哲士(やまもと てつじ)
1948年生まれ。
政治社会学、ホスピタリティ環境学。
主な著書に、『ミシェル・フーコーの思考体系』、『ホスピタリティ講義』、『国つ神論』、『くもの日本心性』、『高倉健・藤純子の任侠映画と日本情念』、『フーコー国家論』ほか多数。

ご注文は「RCC」→ Fax. 03-3294-2177

文化科学高等研究院出版局

tel:03-3580-7784 fax:03-5730-6084

島の自然と文化学

LIBRARY ICHIKO 158 SPRING 2023 1950円(税込)

ISBN 978-4-910131-37-5 C1010 ¥1500E

貴店名

部数

冊